「ウェスレーとフレッチャー」

～聖霊のバプテスマ論をめぐって～

工藤弘雄

２０２０年
第３５回聖化大会
セミナー資料

2020 年・第 35 回関東聖化大会セミナー

ウェスレーとフレッチャー
～聖霊のバプテスマ論をめぐって～

工藤弘雄

はじめに

1964 年（昭和 39 年）、「ウェスレーとフレッチャーの完全論の合本」が『キリスト者の完全』と題して日本ウェスレー出版協会から刊行されました。翻訳は竿代忠一先生、蔦田真実先生が担当されました。ウェスレーの「キリスト者の完全論」はメソジスト教会の赤沢監督の邦訳などで早くから日本のキリスト教会界に知られてきましたが、フレッチャーの所論は、邦訳では余り紹介されず、知られておりませんでした。

実は、「ウェスレーとフレッチャーの完全論の合本」をいち早く知ったのは、恐らく蔦田二雄先生ではなかったかと思われます。先生の回心や全き聖化の体験の背景には、リーダー・ハリスらのリーグ・オブ・プレヤー、ジョージ・ガヴァンらのフェイス・ミッション、バックストンやウィルクスらの JEB（日本伝道隊）などの英国における聖化運動の潮流が大きな影響を及ぼしています。

先生は、1928 年（昭和 3 年）頃の夏、英国在学中に、スラバンカの JEB（日本伝道隊）夏期修養会に出席したとき、聖会売店でこの「合本」を入手し、愛読されたとのことです。（ウェスレー・フレッチャー『キリスト者の完全』日本ウェスレー出版協会、1987、序、1 頁）

恐らく当時の英国における聖化運動においてはウェスレーと共にフレッチャーのものはごく一般的に親しまれていたと思われます。

「合本」に所収されているフレッチャーの聖化論は、本来一冊の書として刊行されたものではなく、“Checks to Antinomianism”（アンティノミアニ

ズムに対する抗論）という「抗争的所論文」の中から聖化論に関するものが抽出されたものです。蔦田先生は、「メソジストの論理を究めようとするならば、ウェスレーのみでなく、むしろある意味で、それよりもフレッチャーの『チェックス』やクラークらのものを、と推薦さるべきメソジスト運動の至宝である」と記しています。（同書、3 頁）

今回のセミナーでは、ウェスレーとフレッチャーの救済論を並行的に述べ、その中で「聖霊のバプテスマ論」についての両者の見解にも触れつつ、最終的には重層的、立体的に両者の聖化論の構築の可能性を指向したいと願っています。

第一章　ウェスレーと聖化

宗教改革者たちの主たる基調の一つは、ただ恩寵のみによって「罪あるまま義と認められる」ことでした。しかしそのことは、「キリスト教の失われた主調」である「ホーリネスに対する郷愁」を再び呼び起こす結果となりました。それが、十八世紀のウェスレーらによるメソジスト運動の胎頭により、人間の心底からの叫びであるホーリネスの真理と恵みが教会歴史の前面に踊り出ることになりました。ただ、ホーリネスをカソリック的な律法の下において追求するのではなく、あくまでもプロテスタント的な恩寵に根ざして追求したところにウェスレー派のホーリネスの特質がありました。

Ⅰ．聖化を求めて

ジョン・ウェスレー（John Wesley, 1703～1791）は十八世紀を生きた人です。その時代とは、近代主義の台頭した理性に重きをおく時代でした。社会的には産業革命による社会秩序の混乱の時期でもありました。また教会内部に目を転じると、宗教的情熱は低下し、生きた信仰は喪失、説教の貧困、教職者の私生活の乱れは目を覆うばかりでした。宗教改革時代とは違って、この時代は確かに聖化による信仰復興を求めていたのです。ですから、一六世

紀の時代の叫びが、カソリック教会の中での信仰義認に基づく信仰復興運動であったとするなら、一八世紀の時代の叫びは、プロテスタント教会の中での聖化に基づく信仰復興運動であったと言えます。やがて、ウェスレーらのメソジスト運動により英国は一変、それゆえ、この運動は英国をフランス革命のような血の革命から救ったとも言われています。

まず、ウェスレーがどのように聖化の恵みを求めたか。その求道の旅について見ることにしましょう。

１）１７２５年頃から、ウェスレーは、トマス･ア･ケンピスの『キリストに倣いて』、ウィリアム･ローの『キリスト者の完全』、『厳かな召命』、ジェレミー･テーラーの『聖なる生、聖なる死』の書物に触れます。

２）この時点でウェスレーは、聖化とは「意志の単純と愛情の純潔」であり、「神への全き献身」であるとの聖化の聖書的な概念を把握します。この聖化の概念は生涯不動でした。

３）しかし、彼にとって致命的なことは、その聖化を律法の下における自己の努力により追求し、獲得しようとしたことにありました。

４）１７２９年、聖書を唯一の標準として研究開始。「キリストのようにされ、キリストのように歩むこと」を求めます。

５）１７３３年１月１日、オックスフォード大学、聖マリヤ教会で「心の割礼」の説教。霊と心のすべての汚れからのきよめと愛情のすべてを主なる神に帰することを語ります。

６）１７３５年、アメリカ・インディアン伝道のため渡米。オックスフォードの学者、オックスフォード「ホーリークラブ」の指導者、英国国教会の司祭ウェスレーが今やアメリカ･インディアン伝道の宣教師として渡米したのです。

（当時、ウェスレーは大学助教授としては年給 120 ポンド。しかし、アメリカ宣教師として 50 ポンドと言われています)。船中（シモンズ号)、２６人のモラヴィア兄弟団クリスチャンが嵐の中でも恐れのない不動の信仰をもっていたのに衝撃を受け、感動。

７）１７３６年、モラヴィア派指導者シュパンゲンベルク（Spangenberg）に会い、問答をします。

「あなたはイエス･キリストをご存知か」。

「私は彼が世の救い主であることを知っています」。

「然り、だがあなたはそのお方があなたを救われたことをご存知か」。

このやりとりの中でウェスレー自身「なんとしらじらしい答えであったか」と日記に記します。ウェスレーは個人的、人格的にイエス･キリストを知っていなかったのです。

８）１７３８年２月１日、ジョージア伝道に結実なく帰英。「私はお天気屋の信仰である」と述懐。

１７３８年３月４日、モラヴィア派宣教師ピーター･ベーラーと接触。

１７３８年５月２１日、恐ろしい病いの苦しみの中で弟チャールズ回心。

９）１７３８年５月２４日、ロンドン、アルダースゲイト通りの集会所にて回心。

About a quarter before nine, while he [Luther] was describing the change which God works in the heart through faith in Christ, I felt my heart strangely warmed, I felt l did trust in Christ, Christ alone, for salvation, and an assurance was given me, that He had taken away my sins, even mine, and saved me from the Law of sin and death.

「９時１５分前ごろ、彼（ルター）がキリストを信じることを通して神が心のうちになされる変化を記しているのを聞くうちに、私の心が不思議と燃えるのを覚えた。私は、私の救いのため、キリストを、ただキリストだけを信じた、と感じた。そして、キリストが、私の罪を、私の罪さえも取り去り、私を罪と死の法則から救ってくださったとの確証が与えられた」。

10）この福音的回心後、平安な中にも誘惑のため心重くなることや、神の御霊を悲しませ、神が御顔を隠されることを経験することがあったとしても、ウェスレーはそれまでと違って律法の下ではなく、恩寵による福音の下における全き聖化を追い求め始めます。

11）その後、１７３９年１月１日未明、フェタア横町での愛餐式で神の御力が烈しく降り、神の御臨在に圧倒される経験は、使徒時代の聖霊による力強い神の御力の顕現を思わせられる。ブリストルでウェスレーが三千人の聴衆を前に最初に野外説教をしたのは同年の春、４月２日のことでした。

12）１７６０年以降、新生と全き聖化の区別は鮮明になり、聖化の瞬間性が強調される。

１７６５年以降、認罪、悔い改めなど、救いに先立つ「先行恩寵」が強調されます。こうして、彼の聖化理解は進化し、すべて聖霊の働きの中でなされる「先行恩寵」、「新生」、「全き聖化」の三段階に至る「聖書的救いの道」が形成、彼のオルド･サルティス（救いの順序）論は完成します。

２．罪を排除する愛

ウェスレーは彼の信じる聖化の恵みを神からの「大いなる供託物」（グランド･デポジタム）と呼び、すべてのキリスト者がこれを共有すべきものであるとの使命を抱きます。そこでウェスレーの聖化論をまず総括的に確認したいと思います。そのためにハーバート･マゴニガル博士が１９９８年年秋、日本における一連の聖化大会において、「罪を排除する愛―ジョン･ウェスレーのクリスチャン･ホーリネスの特質」と題して挙げた五つの要点を紹介することにしましょう。

１）聖化は聖書そのものが啓示する究極的な真理である

ウェスレーは聖書全巻においての神の民がきよい生涯に招かれているとの不動の確信を抱く。聖書こそ彼の教えた唯一の源泉。それゆえ彼が聖化を定義づける時、常に聖書そのものの用語を用いた。例えば、聖化を「キリストの心を心とすること」、「キリストのように歩むこと」、「心を尽くし、力を尽くして神を愛し、自分自身のように隣人を愛すること」、「新しき人を着ること」などであって、彼はそれを「聖書的ホーリネス」と

言った。「聖書が語っているかどうか」、これこそが聖化における彼の不断の関心事であった。

２）聖化は信仰義認から始められる

ウェスレーの聖化の教理に関して私たちが注意深く心にとめなければならないことは、「聖書的救いの道」において、義認は聖化に先行するというだけでなく、それはきわめて重要なことであるが、義認においてすでに聖化のわざが始められているということである。ウェスレーは義認の内容を罪のゆるしとそれに続く神との平和であると説明しているが、ただちにそれに加えて、義認の段階で私たちと神との関係が変化するのみならず、新生という実質的な変化が起こり、聖化のわざが開始することを力説。義認と聖化を混同せず、両者を明確に区分しつつも、しかし、両者を全く切り離すことなく、平等に力説するところにウェスレーの聖化論の弾力性が認められる。

３）聖化は内心の汚れからの全き聖潔である

聖書と教会の教えと経験から、義とされ、新たに生まれたキリスト者の中に罪が残存することをウェスレーは肯定。この点においては、カルヴァン主義などと全く同じ。しかし決定的相違は、ウェスレーは新生した信仰者において「罪が残る（remain)」と言い、カルヴァンは「罪が支配する（reign)」という点。それらの「残存する罪」は、高ぶり、自己中心、世を愛する愛、そしり、ねたみ、憤り、貪りなど。聖書の約束に立つウェスレーの確信は、これらの罪は死に至るまで継続するのでなく、この地上の生涯において、神はこれらの罪から私たちを全く救い出してくださるということであった。

４）聖化は愛の完全において現実になる

ウェスレーの神学は「愛の神学」と言える。神と人への全き愛こそが律法の成就。彼が終始一貫主張してきたことは「罪を排除する愛」。１７７１年、彼は手紙の中で、「全き聖め、あるいはキリスト者の完全とはきよい愛、即ち罪を放逐する愛以外でもなく以下でもなく、その愛が神の子の心と生活を支配することである」と記している。重要なことは、愛が全

くきよめられた者の心に「宿る」というだけでなく、「支配する」ということである。

５）聖化は常に瞬間的であり、漸進的な経験である

ウェスレーは信仰による義認とともに信仰による聖化を説く。それゆえ聖化は信仰により瞬間的に与えられ、同時に漸進的に成長すると確信した。人の死に瞬間があるように罪の破壊にも瞬間がある。全き聖化の経験の証言を彼は入念に聞く中で、ますますこの確信を深めた。それゆえに勧める。「信仰もってそれを期待しなさい。あるがままで期待しなさい。そして、今、期待しなさい」と。

３．ウェスレーの救済論－オルド･サリュティスをめぐって－

それでは、ウェスレーの救済論においてオルド・サリュティスがいかに形成されたかについて見ることにしましょう。オルド･サリュティスとは、イエス・キリストを通して私たちになされる救いの秩序、救いの順序を言います。ウェスレーは、先に述べたように聖書的用語を用いて、繰り返し、繰り返し、「キリスト者の完全」の概念を明らかにしようと試みました。「心と生涯を全く神にささげること」、「神の像への全き回復」、「キリストの心を全く自分のものとすること」、「キリストのようになり、キリストのように歩むこと」などが聖書的用語を用いてのキリスト者の完全の概念です。

驚くことに、１７２５年頃には彼は既にこうしたキリスト者の完全の概念を把握していました。それは、アルダースゲイトの「心が不思議に燃える」体験以前です。すなわち信仰によって義と認められ、新生、回心の恵みにあずかる以前、彼はすでに聖化の概念を把握していたことになります。

１７３８年５月２４日、午後８時４５分頃、「私の心が不思議に燃える」回心、新生の体験以後、彼は聖化を包含する救いへの姿勢を百八十度方向転換しました。それまでは、キリスト教的律法の下で自己の努力に基づいて聖化を求めていたのですが、アルダースゲイト体験以後、全く神の恵みの下で聖化を求める姿勢に変わったのです。とは言えウェスレー

において、この地上おける救いの究極目標である聖化の本質的概念については、それまでのものと全く変化はありませんでした。リンドストロームが言うように、「宗教の真の目標と本質としての聖化」の受け止め方は、１７２５年以来不変だったのです。(Lindstrom,H Wesley and Sanstification Epworth press, 1956. p.60)

彼は、全き聖化の体験が地上におけるキリスト者の生涯においても可能であると確信し、それはまた、恵みの中で絶えず成長をするものであり、「キリストの満ち足りたみ姿」にまで向かうものであると受け止めていました。(Wesley, J. The Work of John Wesley, VI,p.509)

ウェスレーのオルド･サリュティスにいくつかの段階を認めることができるにしても、目的はただ一つ、それは「キリスト者の完全」であり、「全き愛」でした。

次に、ウェスレーにおけるオルド･サリュティスの土台とは何であったか、さらに、ウェスレーの言うオルド・サリュティスの諸段階（stages）について見ることにしましょう。

１）オルド・サリュティスの土台

オルド･サリュティス論にあたって二つの重要な要素は、その土台とその目標です。私たちは、使徒パウロの救済論におけるオルド･サリュティスをローマ人への手紙において見ることができるでしょう。使徒パウロのオルド・サリュティスの大枠は義認論、聖化論、そして罪悪論です。とりわけ4章25節-5章11節は救いの順序の全体像を描写したものと言えます。ジョン･ストットに言わせれば、「キリスト者生涯の美しい総括」(a beautiful summary of the Christian life）と言うことになります。(Stott,John, R.W. Men Made New, I.V.P.　Leicester, 1978, P.13)。換言すれば、ここに「キリスト者の救いの秩序における美しい総括」があると言えるでしょう。

では、この美しいキリスト者生涯の総括の土台は何であったでしょうか。それは明らかに4章25節、「主はわたしたちの罪過のために死に渡され、わ

たしたちが義とされるために、よみがえられた」というキリストの贖罪の事実にあります。その土台に立って、「信仰によって義とされる」、「神との平和を得る」、さらに、「彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられる」、そして「神の栄光にあずかる希望をもって喜ぶ」という救いの諸段階、オルド・サリュティスが続くのです。

ウェスレーにおいても、キリストの贖罪の事実こそが義認や聖化の土台でした。アルダースゲイト体験以前、彼は救いの土台を人間の努力、克己においていました。しかし、アルダースゲイト体験以後、彼の律法的姿勢は福音的姿勢へと百八十度変化したのです。「１７３８年『ウェスレーによって』獲得された義認に関する新しい知識と共に、当然のこと、贖罪が前面に出てくる。義認がその上に建てられている岩こそが贖罪なのである」(Lindstrom, p.56) とリンドストロームは言います。それまでウェスレーの敬虔の本質を構成するものは人間の義務であり、苦行にほかならなかったのです。

アルダースゲイト体験後、ウェスレーはオックスフォードの聖マリヤ大聖堂で説教します。その説教にはアルダースゲイト体験以前と明白な変化が見られます。信仰はただ単に「キリストの全幅的な福音を承認するだけでなく、キリストの血潮への全き依存であり、キリストの生、死、復活の功績への信頼であり、キリストを私たちのあがない、私たちの生活、私たちのために与えられたお方、私たちの内に生きたもうお方としてもたれかかる」ことであるとウェスレーは語ったのです。(Works Vol,1,p.121)

リンドストロームは言います。「従って義認は、三つの関連している要因と緊密に結合している。神からは、神の憐れみと恵み、キリストからは、キリストの血によるあがないと、キリストの血による賠償金と、キリストの律法の完全な充足との両者による、神の正義への賠償。そして人間からはキリストの功績による真の生ける信仰。だが、この信仰は人間自身の働きではなく、人間の中で神が働いておられるものである」(Lindstrom,p.110)。マドックスもまた、「キリストの受動的従順はその死において究極的刑罰のささげものであり、彼の能動的従順は彼の生涯における神の道徳的律法の積極的な成就である」と語ります。(Randy Maddox, Responsible Grace, Abingdon

Press,1994. p.103）ウェスレーにおいては、贖いのみわざにおいて、キリストの能動的、受動的従順の両方を含んでいましたが、その強調点は明らかに後者でした。ウェスレーにとっては、神のあわれみはご自身の義と混ざりあっていましたが、ウェスレーの罪人に対する愛の神学は神の「刑罰的義」に土台していました。結論として言うならば、彼のオルド･サリュティスの土台は御子の血潮の贖いのみによって神の義を満足させることにあったと言いえるでしょう。

アンセルムスが言うように、私たち罪人は神の前に義であり得ない。しかし、キリストは能動的従順をもって神の道徳的律法を成就された。キリストを信じる者は、キリストにあって道徳的律法を成就し、神を満足した者とみなされる。こうしたアンセルムスの満足説にウェスレーは立つことができませんでした。ウェスレーの救済論の土台は、キリストの受動的従順による身代わりの死に置き、その刑罰代償によって信仰者は義と認められるとしたのです。そして信仰によって義と認められた者が、聖霊の働きの中で全き聖化に向かって進み行くと理解しました。ですから、もしウェスレーがルターのようにアンセルムス的能動的義、‘obedientia activa’の要素を受け入れていたとしたら、彼のオルド･サリュティス論は決して形成されなかったと言えます。

ウェスレーはこのように言います。「もちろん、義認は神が、ご自分が義とするその当の人々において、欺かれているということを決して意味しない。すなわち神が彼らを実際においてはそうでないところのものと考えること、また神が彼らを実際そうであるより以ｸﾄのものとして考えるということを意味しないのである」。(Works,Vol, 1, Justification by Faithp.188,『ウェスレー著作集』3, 説教上、新教出版社、1980、150 頁） キリスト者は現実的には罪人でありながら、信仰によってキリストと結合し、キリストにあってあたかも道徳的律法をことごとく成就し、神を満足させてきた者とみなされるとすれば、実際においてそうでないものをそうであるかのように神が認めることになりはしないでしょうか。

ウェスレーのオルド･サリュティス論において、救いのみわざは動的（ダ

イナッミック）であり、また漸進的（プログレッシブ）なものでした。厳密に言えば、ルターにおいては聖化における成長、前進する聖化の教理はありません。それゆえ、神の義や聖の「転嫁説」（imputation theory)、「前進とは始めに戻ること」（to progress is to begin again)、「あたかも神学」（as if theology)、「義人であって同時に罪人」(simultaneously just and sinner) などのルター的要素をウェスレーの中には見出すことはできません。

リンドストロームは次のように言います。「身代わりによる律法の充足という考えをウェスレーが退けたのは、無律法主義に反対しての彼の苦悶の結果なのである。彼の見るところでは、まさにその考えの本質は、人間の代わりにキリストが律法の諸要求を満たして下さったがゆえに、人間は道徳的律法を成就するように指示されていないという考えの中にある。それ故に、ウェスレーは、贖罪と義認とから律法の充足を引き離し、その代わりに、それを聖化に結びつける。このことが、彼の神学において何故に律法の充足という意味での聖化が、あのように重要な位置を占めているか、を説明する」。（Linndstrom, p. 75)

救いの秩序においてその目的と共にその土台は重要な要素です。ウェスレーのオルド・サリュティス論において、その諸段階は前進、発展するものの、その土台と目的は絶対不変のものであったのです。

２）オルド・サリュティスの諸段階

すでに触れたようにウェスレーはキリスト生涯の全過程にいくつかの霊的段階を認めていました。使徒ヨハネの言うところの段階を引用して、それを「幼児、若者、そして父」とも表現することもできました。コックスが指摘するように、救いは「赦しをもって始まり、きよめへと継続し、そして御国をもって完結する」と大きく区分けすることもできました。(Cox, p. 75) マドックスも人間の救いを大別して、第１に罪の刑罰（penalty of sin）からの即刻の救出、第２に、罪の疫病（plague of sin）からの順次の救出、そして第３に罪の実在（presence of sin）とその影響からの終末的救出という

ことができました。(Maddox,p.90)

こうした３区分に加えて、ウェスレーはこれをさらに詳しく区分しました。新生の前の先行恩寵（prevenient grace)、きよめあるいはキリスト者の完全の初期的段階としての新生、そして全き聖化へと続き、その聖化を消極的には「意志的、内的罪と呼ばれる罪からの自由」、積極的には、「聖霊の満たしにおける神と人への完全な愛」としました。

①先行的恵み

「先行的恩寵」（prevenient grace）はウェスレーのオルド･サルリュテイス論における第一の段階です。それは「たましいにおける最初のあけぼの」の段階と言えるでしょう。堕落した魂への神の最初の働きかけです。救いは神の側からの先行的恩寵をもって始まります。

第１に、聖霊による先行恩寵はまず認罪（conviction of sin）をもたらします。「罪人としての自らの認識」こそ救いへの第一段階となるのです。そしてこの罪のコンヴィクションは、救いに先立つ聖霊による働きであり、神の賜物であるのです。

第２に、この罪のコンヴィクションは、義認に先立って最初の悔い改めを罪人にもたらします。その悔い改めと悔い改めの実の位置づけは救いの信仰に先立つものです。「それゆえに悔い改めと悔い改めにふさわしい結実はある意味で義認にとって必要そのものである」（Works,Ⅱ,p.162）とウェスレーは言います。また、「それらのものは信仰と同じ意味で必要でもなければ同じ程度に必要であるというのではない」とも言います。（前掲書）「なぜなら、悔い改めとその実は信仰に導くために、信仰を増進させ、継続させるために遠く離れた仕方で必要である」と言うのです。（前掲書,p163　リンドストローム、邦訳 140 頁）ですから、真実な救いの信仰はただ恵みにより与えられるものであり、それは救いの信仰に先立つ「認罪と悔い改め」によるものなのです。

②救いの信仰

認罪や悔い改めと違って信仰は即座に直接的に義認にとって必要です。信仰だけが義認
の唯一の条件と言えます。この信仰はキリストが私を愛してくださり、私のためにご自身を与えられたとの確信を含むものです。(Works, Ⅱ, p. 160) そしてこの確信は常に聖霊のあかしと関係を持つものです。(ローマ 8:16, ガラテヤ 4:6)。ですから、確信、信任、信頼、そして確証などと呼ばれるものは、信仰から起こされる二次的行為ということができます。

義認をもたらした信仰も言うまでもなく神の賜物です。もちろんこの信仰は異教徒が持つ信仰でも悪魔が神は唯一であると恐れるような信仰とは全く異なります。それはキリストを信じる信仰であり、キリストにより神に来る信仰であって、何を信じ、何に信頼するかという正当な目的が伴う信仰なのです。それはまたキリストの血への全き信頼であり、キリストの生涯、死、復活の功績に信頼するものであり、私たちの贖いと私たちの生涯のためのキリストへの全きより頼み、私たちに与えられ、私たちのうちに生きられるキリストへの全的信頼を意味するものです。(Works, Ⅰ, p. 121)

③義　認

義認は私たちに神との関係的、立場的変化をもたらします。それは罪の刑罰からの救いを意味します。ウェスレーにおいてキリストによる救いの最終局面における最終的義認の立場は堅持されるものの、ウェスレーとルターとの救いの秩序における義認の位置づけは対照的でした。リンドストロームによれば、「ルターにとっては、義認が救いの全内容を内包することができるのに対して、ウェスレーにとっては義認は一つの進行過程であり、救いの全的内容において、義認はただ最初の、そして基礎の段階にすぎない」と言うのです。(Lindstrom, p. 92)。

ウェスレーにとって義認は罪の赦しを含むものとなります。「義とせられ、また赦されているものに、神は『罪を認めず』、彼を有罪と宣告しないのである。このために神は彼をこの世においても、また来るべき世においても有罪と宣告しない。彼の罪、思想・言葉・行為における彼のすべての過去の罪が

覆われ、消しさられ、あたかも存在していなかったごとく、彼に不利なものとして記憶されたり、指摘されたりしないであろう」(Justification by Faith, 邦訳　説教上 3,151 頁)

罪の代価はキリストの血と義、義認の結果は神との平和であり、神の栄光を望む言い尽くし得ない喜び、そして義認の条件はただ信仰のみです。

④新　生

信仰者が義とされると同時に、彼は再び、上から、御霊によって生まれます。義認が「関係的変化」(a relative change) をもたらすのに対して、新生は「実質的変化」(a real change) をもたらします。新生は生まれつきの罪の力からの解放ということができるでしょう。

「キリスト教の全範囲にわたって『根本的』と言われるのが適当であるような教理があるとすれば、それは疑いもなく、義認の教理と新生の教理との二つである。前者はわれわれの罪をゆるすにあたって、『神がわれわれのために』なされる偉大な業に関係し、後者はわれわれの堕落した本性を新たにされることによって、神が『われわれの中に』なされる偉大な業と関係している。時間の順序から言えば、両者のうちのいずれもが他に先立つということはない。イエスの贖いに通して、神の恩寵により、われわれが義とされる瞬間に、われわれはまた『霊から生まれる』（ヨハネ３・６）のである。しかし、いわゆる『思考』の順序から言えば、義認は新生に先立つ。われわれは最初に神の怒りが取り去れることを考え、それから神の霊がわれわれの心の中に働くことを考える」。(Works,H. The New Birth, p.187　邦訳、説教下 49 頁)

⑤義認の後の悔い改めと全き聖化に先立つよきわざ

信仰者が「再び生まれた」その時から漸進的に聖化へのみわざが開始します。新生は聖化の始まりであり、「初時的聖化」とも呼ばれます。しかし、「新生は聖化の一部であり、全体ではない。それは聖化への門でもあり、入口である」とウェスレーは言います。(Works, Ⅱ, The New Birth p.198.邦訳　説

教下,66 頁)。

新生を経験した多くの者たちはすべての罪は過ぎ去ったとの思いを抱くでしょう。しかし、しばらくの後、信仰者の中に罪が残存していることを見い出すのです。これが「肉の思い」、「内在の罪」と呼ばれているもので、もはやその罪が信仰者を支配しないものの、信仰者のうちに「残存する」(remain)とウェスレーは言います。

この段階から、どのようにして「全き聖化」に至るか、ウェスレーは信仰者に働く三つの聖霊の働きを示します。

第１は、新生を経験した信仰者のうちに残存する罪のコンヴィクションです。それらの罪とは、高ぶり、自己中心性、世を愛する愛、そして、ねたみ、憤り、貪りなどです。聖霊は信仰者にこれらの罪のコンヴィクションを与え、次へのステップへと導かれます。

第２は、全き聖化を求める過程における「悔い改めとその結実」です。全き聖化に先立つ真実の悔い改めは信仰者に「よきわざ」(good works) をもたらします。ウェスレーは、そのよきわざの内容を『キリスト者の完全に関する簡明な説明』において「どのようにしてこの変化のくるのを待つべきか」を説明します。

「不注意な無関心や怠慢な無活動の態度においてではなく、力強い全面的な服従をすること、すべての戒めを熱心に守ること、慎みと努力を惜しまぬこと、己を捨て日々己が十字架を取ること、更にあつい祈りと断食を守り、神のすべての命令を忠実に行うこと。―このような態度で待つべきである。」(A Plain Account of Christian Perfection, p,62.　邦訳、日本ウェスレー出版協会、98 頁)

第３は、聖めの信仰 (sanctifying faith) です。信仰によって義とされたように、全く同じく信仰によってきよめられます。全き聖化のただ一つの条件は信仰のみです。そして、その信仰は神の賜物であり、聖霊の働きによるものです。先のよきわざと信仰の関連をウェスレーは次ぎのように説明します。

「私達は単純な信仰によって潔めを受けるというのは事実である。しか

し、神は私達が神の定めたもうた方法により力をつくして求めるのでなければ、その信仰を与えたまわないし、また与えようとしたまわない。」（前掲書　同頁）

そして、ウェスレーはその恵みを「信仰によって期待せよ、あるがままに期待せよ、今期待せよ」（expect it by faith, expect it as you are, expect it now!）と勧めます。

⑥全き聖化

全き聖化は新生とは別のより高い区別された段階と言えます。その心がすべての罪からきよめられ純心な神と人への愛に満たされることです。ウェスレーは、『キリスト者の完全に関する簡明な説明』の終わりの部分で、「キリスト者の完全」ないしは「全き聖化」について成熟した洞察をもって述べています。それを要約すると次のようになるでしょう。

(1) 完全というものがある。それは聖書に繰り返し、繰り返し述べられている。
(2) それは義認と同時ではない。義とされた者が「完全に向かって」進むべきである（ヘブル 6:1)。
(3) それは死に臨んで来るものではない。聖パウロは生ける者のうちに全き者のあることを述べている（ピリピ 3:15)。
(4) それは絶対の完全ではない。絶対の完全は神にのみ属する。
(5) それは人を過失なきものとするのではない。
(6) それは、罪なき完全である。言葉の言い争いは無意味。「罪よりの救い」である。
(7) それは「全き愛」である（Ⅰヨハネ 4:18)。愛は完全の精髄である。
(8) それは進歩、改善の余地があり、恩寵に成長することができる。
(9) それは失われることも可能である。
(10) それは、漸進的わざである。
(11) それ自体は瞬間的であるのか。罪が止むとすれば、罪の存在について最後の瞬間があるはずである。

ウェスレーの言う「キリスト者の完全」、「全き聖化」は、一言にして言えば、「罪を排除する愛」（Love Excluding Sin）でありました。

結び

ウェスレーの救済論におけるオルド･サリュティスを見る時、彼がいかにキリストの救いを立体的かつ段階的にとらえていたかがわかります。そして、その救いが先行的恩寵における段階、義認･新生における段階、そして、全き聖化への段階とその成熟のすべての段階においてキリストの贖罪のみわざに根ざし、聖霊の働きが主導権を取っていたかがわかります。

宗教改革者たちと比較する時、ルターの場合、義はあくまでも転嫁（imputation）であり、
分与（impartation）ではありませんでした。「キリストにありての聖」、「罪人であり同時に義人」という「転嫁的義認･聖化」がルターの義認・聖化論の特質でした。

カルヴァンの聖化論はルターと根本的に異なります。キリストの義はただ転嫁されるのみならず、義と化せられるというのです。義認と聖化は二重の祝福となって進みます。しかし、
カルヴァンはその聖化の過程を継続するキリスト者の「悔い改め」と見なしました。キリスト者は、罪を悔い改めることにより、信仰によって救われる。しかし、真の意味での悔い改めは、人が新生の恵みを経験したところから始まるというのです。カルヴァンはこれを信仰者であるゆえの「福音的悔い改め」と言いました。その悔い改めの実践が自己を否定することであり、十字架によって古き自己を殺すことであり、聖霊に満たされることでありました。こうしてキリスト者は徐々に漸進的に聖化されていきますが、地上における全き聖化は否定されました。

ウェスレーの場合、その弟子フレッチャーも指摘するように地上における聖化を高調しつつも、「最終的義認」に最終的な救いの基盤をおいています。信仰者が最終的に聖なる神の前に立つ基盤はキリストの血による贖いのほ

かありません。しかし、ウェスレーは、地上における救いの最終ゴールを全き聖化とその成熟に求めました。宗教改革者たちが「罪の中における救い」（salvation in sins）を強調したのに比して、その強調点は「罪からの救い」（salvation from sins）にあったと言えます。

第二章　フレッチャーと聖化

ジョン・フレッチャー（John Fletcher, 1729～85）は、ジョン・ウェスレーと共に働いた初期メソジスト運動の指導者、弁証家、また神学者でした。ジュネーブ大学で学び、やがてスイスから英国に渡り、メソジスト教徒と接触する中で回心します。１７５７年、英国国教会の按手礼を受け、２５年間シュロプシャイヤーのマデレイで牧会をするとともにメソジスト運動を推進しました。ジョン、チャールズのウェスレー兄弟と共にメソジストのトロイカ、三頭政治とも言われました。５１歳の時、長く友情を培ってきた初期メソジスト運動におけるきわだった女性、メアリー・ボウズンクエット（MaryBossenguet）と結婚。結婚生活はわずか４年でしたが、１７８５年８月５日、ウェスレーに先立って「シュロプシャイヤーの聖徒」は優れる王国に入国しました。

１７５７年、ウェスレーは日記に記しています。

「３月２０日。フレッチャー君は再び私を助けてくれた。神の方法とは何ともすばらしいことか。私の体力が弱った時、英国で誰一人私を助けることもできず、助けようともしなかった時に、神はスイスの山の中から万事万端の助け手を送ってくださるとは。彼をほかにして彼のような助け手をどこで見い出すことができようか」。

初期メソジスト運動の伝記家ルーク・タイヤーマン（Luke Tyerman）は記します。

「ジョン・ウェスレーは伝道旅行をし、メソジストの会を形成し、会を指導した。チャールズ・ウェスレーはメソジスト教徒のために比類なき賛美

歌を作曲した。スイスのカルヴァン主義者出のジョン･フレッチャーはメソジスト教徒が心底信じている教理を精巧に論じ弁獲した」。(Luke Tyerman, Wesley's Designared Successor, London:Hodder and Stoughton, 1882, p.346)

フレッチャーはウェスレーの後継者となるべく招かれていましたが、ウェスレーに先立って死にました。１７９０年、「アルミニアン・マガジン」(Arminian Magazine) においてウェスレーはこう記します。

「過去８０年間、私は心と生涯における多くの聖なる優れた人物を知っている。しかし、彼のように常時、心から神に身も霊もささげ、すべてのことにおいてとがめられるところがないという点で、彼と等しい人物を私は知らない。私はヨーロッパにおいてもアメリカにおいてもこのような人物に出会ったことがないし、永遠の此方において彼のほかにこのような人物に出会うことも期待していない」。(WJW 11:365)

フレッチャーの妻についてのウェスレーは次のように評価しています。

「彼女こそはフレッチャー氏にふさわしいと判断し得る英国におけるただ一人の女性である」。(WJW 7:437)

フレッチャーの神学書に七つの抗論 (checks) があります。その神学論議は神学のほとんど全領域に及びます。神の意図、選び、予定、全的恩寵、贖罪の範囲、信仰の性質、信仰者と律法、転嫁(Imputation)と分与 (Impartation) の聖化の相違などに論及しています。

特に最後の抗論の主題は「キリスト者の完全論」です。ここにおいてすべての罪からのきよめと聖霊のバプテスマ、聖化の瞬間性と漸進性などが論じられています。信仰者は「神のかたちに回復され得る」、また「御霊の実を結ぶことができる」と主張し、「神のかたちなき神の子」、「御霊の結実なき御霊による新生」を主張する者に論陣を張ります。このようにウェスレーの言う「全き愛の教理」を擁護しました。

フレッチャーの聖化論における最大の特徴は、ウェスレーの言う「キリス

ト者の完全」、または「全き聖化」を「聖霊のバプテスマ」と結びつけた最初の人であったということです。やがて１９世紀のホーリネス運動において、ホーリネスに関する用語は、「キリスト者の完全」より「聖霊のバプテスマ」が多用され、第二の転機性や、瞬間性が一層強調されることになります。ただ１９世紀のホーリネス運動においては、聖化論の体系の図式化、短絡化された聖化への近道が強調される傾向が強まりました。２０世紀に入ると聖霊のバプテスマ論は、聖化の枠を超えた広がりを見せます。聖霊の賜物、聖霊の力に強調点が移るのです。２０世紀初頭における第一波のペンテコステ運動、７０年代からの第二波のカリスマ運動、８０年代以降の第三の波、力の伝道などがそれです。これらの傾向は、異言、予言、いやし、悪霊追放など、聖霊の賜物、力、不思議なわざ、また霊の戦いなどにおける聖霊の働きを宣教の前面に出すことになります。しかしながら、教会の表面上の活性化の反面、混乱や分裂の危険性もはらみます。

フレッチャーの聖霊のバプテスマ論においては、聖霊のバプテスマはあくまでも全き聖化と結びつけられ、ウェスレー同様、聖霊の品性的結実や聖霊のあかしが強調されました。ただウェスレーは、「キリスト者の完全」あるいは「全き聖化」を「聖霊のバプテスマ」と呼ぶことには全面的に否定しないものの、積極的には肯定しませんでした。

フレッチャーの聖霊のバプテスマ論

聖霊のバプテスマについての聖書的言及は豊富です。
新約聖書には７箇所、マタイ 3:11、マルコ 1:18、ルカ 3:16、ヨハネ 1:33、使徒１ :5、11:16、Ｉコリント 12：13 において言及されています。

旧約聖書にはそれを予測させるものとして、ヨエル 2:28～32、3:1～2、イザヤ 32:15、44:3、エゼキエル 39:29、などがあります。

新約聖書において聖霊バプテスマは水のバプテスマとは明らかに区別されています。

信仰者に聖霊のバプテスマが施されることについては、旧約時代の預言者、

バプテスマのヨハネ、父なる神、キリストご自身、そして使徒たちが一様に言及しています。

１）旧約：ヨエル 2:28～32、イザヤ 3:15、エゼキエル 39:29 など。

２）バプテスマのヨハネ:マタイ 3:11。

３）父なる神、「父の約束」:ルカ 24:49. 使徒 1:４～5、2:33。

４）キリストご自身:ヨハネ 7:38～39、14:16～17、14:26、15:26、16:7、使徒１:8。

５）使徒たち：使徒 2:38～39。

救いの歴史における聖霊のバプテスマの成就は、使徒２：１～４において見られます。

１.「父の約束」としての聖霊のバプテスマ

まず、フレッチャーの聖霊のバプテスマ論は救いの歴史における神の活動という枠組の中で考察するところから始めます。それがフレッチャーの救いにおけるディスペンセイションの教理です。

１）救済史における神の活動

三位一体の神が人間の救いのみわざにおいてどのような順序でご自身を啓示されるのか、フレッチャーは三つの時代に区分をします。御父、御子、御霊の三位一体の神が、創造者、贖罪者、きよめ主として段階的にご自身を啓示する時代区分（ディスペンセイション）であるとともに、それぞれの時代には次の時代の約束が伴うのです。

①父なる神の時代　この時代は旧約聖書の時代であって、異教徒に対しては「一般啓示」をもって、ユダヤ人に対しては「特別啓示」をもって父なる神が「創造者」としてご自身を啓示される初時的啓示の時代です。この時代の約束は「贖い主なるキリストの来臨」です。

②子なる神の時代　この時代はキリストの来臨から始まります。この時代は、福音書におけるキリストによって神が啓示される時代です。父なる神の

時代よりも高い啓示の時代であって、御子なる神が「贖罪者」として啓示される時代です。この時代の約束は「聖霊の降臨」です。

③聖霊なる神の時代　この時代はイエスの昇天後、ペンテコステの祝福や「キリストの十全なる福音」に関して最高の啓示が与えられる時代であって、御霊なる神が「きよめ主」として啓示される時代です。この時代の約束は「キリストの再臨」です。

２）信仰者が神を知る三つの段階

フレッチャーは、三位一体の神が時代的にご自身を啓示する三つの時代区分を信仰者の霊的ディスペンセイションに適用し、信仰者が神を知る段階に三段階あるとします。

①創造者、父なる神への信仰

これは神が唯一であり、創造者であることを信じる段階を指します。

②贖い主、子なる神への信仰

これは身代わりとなった贖罪者を救い主と信じる段階を指します。

③きよめ主、聖霊なる神への信仰

これは聖霊のバプテスマによって、慰め主はわれらと「共におられる」だけでなく、われらの「内に住まわれる」ことを経験する段階を指します。

３）フレッチャーのディスペンセーションの教理の源泉

フレッチャーは、この教理の源泉は「使徒信条」や「英国国教会のカテキズム」など「公的信仰」に基づくものであり、何よりもウェスレーのオルド・サルュティス論と全く符合するものであるとの確信を抱いていました。フレッチャーが指摘する三一体の神の三段階によるご自身の顕現とウェスレーが指摘する信仰者が救いを経験する三つのステージは、父なる神への信仰－先行恩寵、子なる神への信仰－新生、聖霊なる神への信仰－全き聖化と符合するというのです。

４）その教理の特質

①統一性における区別性（distinction-within-unity）

三位一体の神は永遠の初めから三位にして一体であられました。天地創造のはじめにおいても、三位一体の神は協同の働きをされています。しかし、その三一の神が歴史の中でご自身を啓示し、私たちの救いの過程においてご自身を顕現されるのには区別性があるとフレッチャーは指摘するのです。ですからローレンス・ウッドは、「フレッチャーにとってディスペンセイションの教理は異端である様態的三位一体論の変化をいうのでもなければ、三神論でもない。むしろ御父、御子、御霊はその三位性が単一の本質をなすゆえに、その活動において常に共同性を保ってきた」と指摘します。(Lawrence W. Wood, Pentecostal Grace, Wilmore:Francis Asbury Publishing Company, 1980, p.186）三位一体の神が三位性を保持しつつ単一の本質をなし、共同の働きをする。唯一の神が人類の救いの働きにおいて三つの区別性―創造、贖い、聖化―の中で協同の働きをするというのです。

フレッチャーは次のように言います。

> 「この三重の現れは御父の時代においても明らかにされているが、御子の時代には一層、鮮やかにされ、聖霊の時代ではさらに増し加わって輝き渡る。自然界においてあらゆるものに生命を与えるものが一つにして同じ太陽であるように。恵みの王国においてもあらゆるものをいかすお方は唯一の同じ神である」。(WJF,7:21,22)

②宣教的、牧会的役割

フレッチャーのこの教理を知るとき、ウェスレーのオルド・サリュティス論と同様に宣教と牧会において正しい指標を与えられます。宣教においては、信仰者が導かれていく過程をこの三つの順序で捉えることができ、牧会においては、真の牧会者として回心者を神の最高の啓示まで導く重荷と責任が与えられるというのです。

こうしたフレッチャーのディスペンセイション（神の救いの歴史）の教理においては、ペンテコステにおける聖霊の注ぎを「父の約束」の最高最大のものとしました。父の約束そのものは、数限りなくありますが、ペンテコステにおける聖霊の注ぎこそは最高最大の約束であり、クリスチャン生涯におい

ても、数限りなくある父の約束の中で、「父の約束」を待ち望み、それを受けるということは、約束の聖霊を待ち望み、受ける祝福をあらわすことになります。こうして約束の御霊の注ぎこそが、最高最大の祝福であるということがフレッチャーの特筆すべきメッセージとなったのです。さらに、フレッチャーにおいては、ペンテコステの日に約束の聖霊を受けた弟子たちを、回心を経験したすべてのクリスチャンも同様の経験を受けるべき見本としました。

ただフレッチャーのこの教理の中には、救いの概念において、父なる神の時代、ウェスレー的に言えば、新生、回心という救い以前に、人が神の恵みに応答することによって救いの機会の余地があるという救いの概念の幅広さが見られます。たとえば、キリストを全く知らない者であっても、良心の光、あるいは自然律法に従った者に神のかえりみがあるという救いの教理の幅広さです。その反面、聖霊のバプテスマを受けた者だけが神の国を受け継ぐという救いの教理の狭量性という二面性が認められます。また、個人的なペンテコステ経験（聖霊のバプテスマの体験）を強調するものの、教会的、一回性をもった歴史的ペンテコステの重要性をさほど強調しないという弾力性の欠如も指摘されます。

それにもかかわらず、このディスペンセイションの教理はウェスレーから絶賛されていることを見落してはなりません。ウェスレーは次のように記している。「フレッチャー氏はわれわれが属する異なった救いの時代についてのすばらしい見解をわれわれに提供している。このむずかしい課題が以前にこれほどまでに鮮明に光の中に置かれたことはなかったと思う。まさにこのために神は彼を起こされたのではなかったかと思われる」。（LJW, ed. JohnTelford. Londn:The Epworth Oress, 1931, ps. 6:272-273）

２．新生の恵みに続く聖霊のバプテスマ

新生した者が、聖霊のバプテスマを受ける。これはフレッチャーにおける聖霊のバプテスマ論の骨格と言えます。この救いの秩序は、新生した者が残

存する罪を解決され、全き聖化に進むというウェスレーにおける救いの秩序と符合します。したがって、フレッチャーにおいては「キリスト者の完全」、ないしは「全き聖化」は「聖霊のバプテスマ」と同義語になります。今日、日本において聖化を高調する多くの教会は聖霊のバプテスマを新生の後にキリスト者が受ける恵みであると告白しています。たとえば、日本イエス・キリスト教団の「信仰告白」においては、赦罪、義認、新生の恵みに続いて、聖霊のバプテスマとその内住の恵みが明らかに告白されています。日本聖化協力会の信仰基準でも次のように告白されています。

「本会は、神の恩寵により、信仰と全き献身を条件としてもたらせられるキリスト者の第二の転機としての全的聖化を告白する。それがすべての罪からの瞬時的な潔めと全き愛を 意味する聖霊のバプテスマであり、さらに、聖霊のご支配のもと、生涯を通じてキリストの似像にまで成長できることを信仰基準とする。」

フレッチャーはさらにキリストの弟子たちのペンテコステ経験は新生した後に信仰者が受ける聖霊のバプテスマの実例であると言ってはばかりません。しかし、この点においてウェスレーとフレッチャーにおいて見解の相違が見られました。１７７０年代、聖霊のバプテスマの恵みが新生に続く恵みであり、キリスト者の完全と同一的恵みであるかどうか、ウェスレーとフレッチャーとの間に神学的論議がありました。

ウェスレーは、「愛における完全」と「聖霊をうけること」の関係について記しています。

「もし彼らがこれを『聖霊を受ける』というなら、そう言うがよい。ただ意味からすれば、この表現は聖書的でないし、全く正しいとは言えない。なぜなら、彼らはみな義とされた時『聖霊を受けた』からである。神はその時『アバ、父よ、と呼ぶ御子の御霊を彼らの心に送られた』のである」。(LJW,5:215)

新生時における聖霊の受領という一点においては、ウェスレーはカルヴァン的と言いえます。１７７０年代、ウェスレーとフレッチャーとの間で手紙などを通して取り交わされた論議を年代的に見ると興味深いものがあります。結論的にいってその論議は平行線を保ったままであると言えるでしょう。幾つかの点で、両者の間には「連結点」があると共に「相違点」がありました。その「連結と相違」の幾つかを紹介しましょう。

第１に、ウェスレー自身正確にはペンテコステ的用語をもってキリスト者の完全を描いていない。聖霊のバプテスマの言及はきわめてまれである。それを義認・新生に結びつけてもキリスト者の完全に結びつけていない。

第２に、ウェスレーはフレッチャーの新生に続く聖霊のバプテスマ論を黙諾（acquiesce）したが是認（approve）はしていない。

第３に、しかし、ウェスレーはフレッチャーの出版物を責任もって校閲している。両者には本質的に神学的に不一致はない。

第４に、両者共に聖霊の力や聖霊の賜物よりも聖霊の証しと聖霊の結実を強調した。

第５に、ウェスレーは、「聖霊を受ける」ことを新生時（義認時）に結びつけ、「聖霊に満たされる」ことを全的聖化、愛における完全に結びつけた。また、「ペンテコステが十分に来た」ことを使徒ヨハネが言う「父たち」と関連づけ聖霊論的用語を用いている。

第６に、ウェスレーは聖霊のバプテスマとキリスト者の完全を結びつけなかったものの、彼のキリスト者の完全の概念は直接的にはペンテコステ的現実性と結びついている。

第７に、ウェスレーは救いの進行過程において三重の聖霊の受領を据える。先行恩寵、新生、全き聖化においてである。一方、フレッチャーは二重の受領を据える。「共におられる」管理人（Monitor）として、「内に住まわれる」慰め主（Comforter）としてである。

基本的にはウェスレーにおいては、信仰者は回心時に「聖霊を受け」、全き聖化時に「聖霊に満たされる」。一方、フレッチャーは、信仰者は、全き聖

化時に意識的、人格的に「聖霊を受け」、聖霊のバプテスマは完全が達成されるまで繰り返される。

第８に、ウェスレーにおいて沈黙、暗黙（implicit）の事柄をフレッチャーにおいてより明白（explicit）なものとされた。フレッチャーは明らかに「父の約束」はキリスト者の完全において成就したと説く。

３．火のバプテスマとしての聖霊のバプテスマ

フレッチャーは、聖霊のバプテスマを「火のバプテスマ」、すなわち罪をきよめるバプテスマと捉えました。これはフレッチャーの聖霊のバプテスマ論において最も重要な項目となりました。罪をきよめる「火のバプテスマ」、心のきよめとしての「聖霊のバプテスマ」こそ、ウェスレーの言う「キリスト者の完全」、「全的聖化」、「全き愛」と符合することになるのです。

フレッチャーの「火のバプテスマ」を要約すると次のようになります。

１）内的および生まれながらの罪からのきよめ

ウェスレーと同様にフレッチャーは「無罪完全論」(sinless perfection)を退けています。われわれ人間は罪の堕落の中で生まれ、その瞬間から事実上律法を破っている。われわれの精神的肉体的能力は弱められているので、全的聖化の後でさえも数えきれないほど律法を破ってしまうことからは免れない。ただキリストのみ、罪からの完全な自由を得、アダム的律法を成就した。この観点からすれば、フレッチャーは、「いかなる良きわざの中でも義人は罪を犯している」と言ったマルチン・ルターと同じ立場に立っていたことになります。ただフレッチャーにおいては、福音的恵みと真理に満ちておられるキリストが仲立ちとなられる「中保的律法」を「キリストの律法」と呼び、この律法の下では、信仰者は主に服従している限りにおいては罪を犯していないことになるが、「アダム的律法」の下では依然罪を犯し続けていることになるというのです。(WJF,5:417,Cox,134)

さらにフレッチャーは、罪の輪郭を明白に区分し、外的な罪、すなわち犯

罪と区別して鋭く人間の内在の罪を描きます。それは「すべての外的な罪の根、地球のあらゆるところに破壊をもたらす汚れの全ての流れの源である」と言い、「地獄的ライオンの爪、龍の歯、サタンの釣り針、恐怖の暴君である死の刺」であり、この内在の罪の鋭い棘は信仰者の心を容赦なく突き刺すというのです。(WJF,6:146)フレッチャーほど内在の罪を鋭く暗い語調で語った者はいないでしょう。彼にとって最も緊急を要する問題は、人をこの内在の罪から救うことであり、最も許しがたきことは人の心にその存続を主張することでした。

２）十字架の磔殺による火のバプテスマ

フレッチャーの言うキリスト者の完全、「極端までの救い」(ヘブル 7:25)は「罪の総体を完全に滅ぼすこと」でした。これが「火のバプテスマ」の核心と言えます。では、いかにして内在の罪、古き人を滅ぼすことが可能なのでしょうか。それは、十字架においてキリストと共に死ぬこと、つまり古き人が破滅されるという「磔殺」（たくさつ）にあるというのです。人間は自分自身の古き人を自分の努力によって殺すことはでない。しかし、キリストの十字架によって古き人、つまり罪の総体を完全に滅ぼすことができる。フレッチャーはそのように確信していたのです。

ガラテヤ５章１９～２４節で、フレッチャーは明確に肉の磔殺と御霊の結実を結びつけて語っています。(WJF, 6:6)フレッチャーにおいてはカルバリーの事実とペンテコステの現実は結合されていました。この点、ウェスレーは「この教理に関して（パウロがしているように）十字架と聖霊とを十分に結びつけてはいない」とサングスターは指摘しています。(Sangster,The Path to Perfection.p.44)　ハーバート・マゴニガルはさらに「御霊によって歩むこと、御霊によって祈ること、御霊に導かれること、御霊によって自由にされることなど、これらの新約聖書的キリスト教の大いなる記述に関して多くの場合ウェスレーは、不思議なほどに沈黙している」と指摘しています。(McGonigle,Nomenclature,65)　フレッチャーにとって、福音とは十字架による火のバプテスマであり、キリストの顕現の輝きは内住の罪を破壊すると

ころから来ていました。

３）完全におけるキリスト者の特権

フレッチャーは、聖霊のバプテスマによってもたらされた「完全」におけるキリスト者の特権を次のようにあげることができます。

①聖霊による輝いた証し、信仰の全き確信が伴う。

②神の臨在の不断の現実感が伴う。

③聖霊により豊かに品性の実を結ぶことができる。

④有益な社会の一員になることができる。

⑤神の国の嗣業を受け継ぐことができる。

⑥義と平和と聖霊による喜びという神の国を内に持つことができる。

⑦いとも輝く義の冠と王国への豊かな入国が約束される。

４）バランスのとれた完全論

フレッチャーの完全論は「中庸の完全論」と言うことができるでしょう。そのバランスについての特徴は次のとおりです。

①命令と約束に基づく聖化

フレッチャーにおいて、神の約束を伴った命令と神の命令を伴った約束が揺るがない聖化の基盤を形成しています。彼は、「あなたがたの信仰の右足が、これらの福音的命令と宣言に立つ時、‥‥その信仰が揺らぐことがないようにあなたの左足を以下の約束に据えよ」と語り、旧約聖書からエゼキエル３６章２５-２７節などの聖句を列挙するのです。(WJF,6:161)

②高すぎもせず低すぎもしない聖化の標準

フレッチャーにおいて、キリスト者の完全は、アダム的完全、天使的完全を意味しませんでした。アダム的律法の下において信仰者が罪を犯しているとみなされることがあっても、キリストの律法の下においては、信仰者がこの「完全の恵み」に生きる時、罪を犯していないというのです。このようにフレッチャーの聖化の標準は、信仰者に希望を失わせるほどに高くもなく、イエスの血の効力を信じ、聖霊の力をより頼みつつ、自

分の救いを全うしなくても到達できるほどに低い標準でもありませんでした。

③自由の恩寵と自由の意志に基づく聖化

フレッチャーにおいて、キリスト者の完全への道程は、神からの全き自由の恩寵に基づくものであるとともに、人間の側からの全き自由の意志を否定するものではありませんでした。

④瞬間的であり、漸進的である聖化

キリスト者の完全は瞬間的に私たちにもたらされるものであり、私たちのうちに徐々に成長していくという両方の道をフレッチャーは肯定していました。

⑤神の恵みにより信じる者になされる聖化

フレッチャーにおいては、全き聖化は一方的な神の恵みに基づくものであるとともに、この恵みに応答する信じる者のうちになされる聖化であったのです。

⑥現在的に可能な聖化であると同時に最終的義認に立つ聖化

フレッチャーにおいて全き聖化は現在達成可能であると信じつつも、最終的に神の前に信仰者が立つ時の拠り所は、イエスの血潮への全的なより頼みからくる「最終的義認」を否定するものではありませんでした。

５）キリスト者の完全の獲得への道

キリスト者がいかにこの「完全」を獲得するかについては次のとおりです。

①信仰者が内在の罪を深く悔い改めること。

②内在の罪の解決があることを信じること。

③きよめの祝福を求め、共同の祈り、個人の祈りをとおして、激しく求めること。

６）燃える愛のバプテスマ

ウェスレーと同様にフレッチャーにおける聖化論の結論は、聖化こそは「全き愛」であり、人間の限界、不完全性の中での「燃える愛のバプテスマ」、

「愛における完全性」であったのです。フレッチャーが言う燃える愛は次の通りです。

①愛は謙遜である。

②愛は全ての人を理解し、全ての人を包む。

③愛は神を喜び、神のみを満足とする。

④愛は勇敢である。

⑤愛は勤勉である。

⑥愛は真理を喜ぶ。

結び

フレッチャーは、宗教改革時代の「信仰による義認の教理」に匹敵するほどの重要性をメソジスト･リバイバル時代の「信仰による聖化の教理」に認めていました。特に宗教改革者の伝統に立つ者が「罪の中における救い」（salvation in sins）を言うのに対して、フレッチャーは徹底して「罪からの救い」(salvation from sins)、即ち内在の罪の破壊と聖霊のバプテスマによる主の顕現を高調しました。この点においてフレッチャーはまさにウェスレーの子であったのです。

フレッチャーによる聖霊の再発見は１９世紀を中心としたホーリネス運動に大きな影響を与えました。それは日本の初期ホーリネス運動においても顕著にあらわれています。「新生・聖化・神癒・再臨」の「四重の福音」を高調した中田重治らも聖霊のバプテスマと全き聖化を鮮明に結びつけています。特に「松江バンド」の中核的存在であった B.F.バックストンにおいては新生した者に与えられる聖霊のバプテスマの恵みを聖化の根幹にとらえ、これを正面から語りました。その後「聖霊のバプテスマ論」は聖化の枠を越えた広がりをもって展開しますがフレッチャーは１８世紀のメソジスト運動と１９世紀のホーリネス運動の仲立的存在であったとも言い得るでしょう。

キリスト者の完全を聖霊のバプテスマに結びつける彼の聖霊のバプテス

マ論、換言すれば信仰者はいつ聖霊を受けるかという論議においてウェスレーとフレッチャーとの間には神学的一致を見ることができませんでした。

しかし、フレッチャーのディスペンセイションの教理はウェスレーのオルド・サリュティス（救いの順序）論を抜きに考えられません。ウェスレーの言う「先行恩寵の段階」はフレッチャーの言う「創造者、父なる神への信仰の段階」、ウェスレーの言う「新生の段階」はフレッチャーの言う「贖い主、子なる神への信仰の段階」、そしてウェスレーの言う「全的聖化、キリスト者の完全の段階」はフレッチャーの言う「きよめ主、聖霊なる神への信仰の段階」と全く一致しています。言うなればフレッチャーが言う新生後の聖霊のバプテスマ論は新生後の全的聖化という二段階的救い、信仰者の第二の転機的恵みを高調するウェスレーが言うキリスト者の完全論と同一線上にあるのです。さらに、内在の罪からの救いと全き愛を基調とするフレッチャーが言う聖霊による火のバプテスマ論もウェスレーが言うキリスト者の完全論と全く軌を一にします。

フレッチャーは「ウェスレー名指しの後継者」と言われました。フレッチャーを見るとき、ウェスレーを抜きに考えられません。同時に真にウェスレーを理解しようとするなら、フレッチャーを抜きに理解できません。その意味でフレッチャーこそ、まさに「ウェスレー神学の建築師」であったのです。

聖化大会
2020